
小さな挨拶の、その後で

山口春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな挨拶の、その後で

【Nコード】

N5969N

【作者名】

山口春

【あらすじ】

部屋の数と、日常と、簡単なイレギュラーと、それを内包する自分。そんな話。

いつも、頭の中に浮かんだ単語に帰結するように文章を考えるのですが、ちよつとうまくいかなかったので、どんな状態からでも書けるようにざくつとした世界で書くことにしました。それ以外は相変わらず、のんびりしたものです。それでは。

103 園部ゆかり

103 園部ゆかり

やっぱり、私のアパートの壁は、すごく冷たい。

隣の部屋から聞こえてくるのは明るい光。明日はどこに行こうかとか、この間買った服がどうかとか。会話は途切れることなく何日間も続いているみたいだ。私は少しでも、壁を叩く。こっん。こっん。会話は途切れない。私は諦めて壁を背もたれに天井をぼつと見上げた。天井は体をしならせて、今にも私の上に降りかかってきそうに見える。私は目のやり場に困る。自分の体を見る。足元から私の体も冷たくなってきてはいないかな？

私が今のアパートに越してきたのはほんの二週間前。だから、まだ私の部屋は私を受け入れてくれないでいる。きっとそのせいなんだろう。私は部屋にいるのがすごく辛かった。この間までやさしかった布団が、急に私を避けているような気がする。食器がしばらく使わなかっただけでも使わせないというように意図的に汚れだしている。わたしの周りの全てが私を嫌がっている。いつも、そこにあるのは午前三時のような薄い闇。

私は多くの時間を部屋の真ん中で過ごす。押しつぶされないように。空虚な空間だけが私を受け入れてくれる。

明日は部屋を片付ける。明日はみんな私を受け入れてくれるかな？私はみんなを受け入れてあげられるかな？朝はなかなか来ない。耳障りな隣の声。

明日は、部屋を片付ける。

108 森下順一

108 森下順一

彼女が来るのは、決まって土曜の午後二時半。僕は小さな机の上で、それよりももっと小さいため息を付いた。冷蔵庫の中には食材が所狭しと並んでいる。しめて三人分の夕食の材料は、一人暮らしの収納スペースに収まる分量ではない。視界の端で鏡を捉える。どこにも行かないのに、僕はずいぶんと着飾ってしまっている。着ているシャツは彼女が僕に与えてくれたものだ。服なんて、どうせすぐ脱いでしまうのに。僕はもう一度ため息をつく。今度は深く、長く。僕は自分があまり好きではない。

壁には大して読んだことのない教科書が、すでに太陽の光でずいぶんと色を変えられてしまっている。灰皿は全部で三つ。台所、リビング、寝室。そのどれもがすでに自分たちのキャパシティを理解してほしそうにぼやいている。床に物はないが、ところどころ汚れている。クローゼットも、整頓されているとはいいがたい。それはそうだ、どうせ誰が来るでもない部屋なのだから。仮に人が来たとして、その人は僕の部屋の惨状を見るや、すぐさま掃除をしてくれるだろうか。そんなことはありえない。文句を言うならば入らなければいい。そうでしょ？それを知っているのか、当然だと思っっているのか、あの人は僕の部屋について何かを言ったことはない。たとえば、あまり見せるべきでないものが部屋にあふれていたとしても、そもそも彼女は、僕が定義する「僕の部屋に来るかもしれない人」とは違うのだから、ここに至る考え方がすでに間違っている。彼女は、「僕のいる部屋にあるべくしてある」人だ。そのどこに、僕の意味をはさむところがあるだろう。彼女は、いる。ただそれだけだ。

僕がやることもなく換気扇の下で三本目のタバコに火をつけた頃、

いつもより少しだけ控え目にチャイムがなった。僕はすぐさまタバコをもみ消す。そして、柔らかに扉が開き、か細い悲鳴のような音が部屋の端まで届くよりも速く、僕は玄関に向かう。そこには彼女がいる。

いつもどおり、部屋からそのまま飛び出したようなラフな姿で、彼女は何も言わず僕の部屋に上がろうと玄関で靴を脱ぎだす。僕はそれをただ黙って見ている。僕はどうするべきだと思う？そんなことは分からない。ただ一つ分かることは僕が彼女を愛しているということだけだ。だから、髪を切ったことなんて気づいてもらわなくてもいい。今日着ている服が似合っているか、そんなことも聞きたくはない。ただそこに彼女がいる。それだけできつと全てが満たされるのだ。僕の愛の形なんて、それこそどうだっていい。

「今日はシチューなんですか？」

「ううん、肉じゃがの予定だけど。なんで？」

「いや、材料で勝手にそう思っただけで。」

「シチューが食べたいの？もう少し寒くなってきたからの方がおいしいと思うけど。」

彼女はあげていた髪を下ろし、冷蔵庫の中のものを確認していく。それが本当に正しいものなのか。自分が残したメモどりのものなのかを。

「でも、良子さんの作ったものならきつとなんでもおいしいんですよね？」

「ちよつとあからさまに褒めすぎじゃない？今度作ってあげるから今回は我慢してね。」

彼女は冷蔵庫にしまっていた食材たちを、次々もとの形に戻していく。まるで時間を巻き戻したように材料は袋につめなおされ、今まさにスーパ―から飛び出てきたような姿に作り上げられる。袋の中にはよく冷えた材料たち。扉にもたれてそれを見つめるよく冷えた僕。僕はこれを見るのが一番辛い。

「よし！今回も完璧！さすが純君。またメモ置いておくから、その時はよろしくね。」

「はい。分かりました。」

僕はさっき消したタバコにもう一度火をつける。煙は僕の体を全て埋め尽くしていく。僕は考えることをやめる。

彼女に出会ったのは半年前だ。ある日、僕は単純な食材を買いにスーパーへ出かけた。そして彼女もいつも通りスーパーへ買い物に出かけた。そして僕たちは鮮魚売り場で出会った。もちろんそうだ、という声が聞こえた。僕たちはやはり出会うのだ。

帰り道、たまたま手に取った同じ魚の話から始まった僕たちの会話は、同じアパートに住んでいるという話で終焉を迎える。きつと世の中のすべてはそういった原理でできている。歯車より何倍もシンプルな構造。僕たちは出会い、体を重ねた。ごく自然に、親密になったただけだと思うんだけど。

僕たちは何度か「偶然に」スーパーで出会い、何度か「必然に」セックスをした。やがて、僕たちのそんな偶然は全てを内包し、既成事実へと変わっていく。僕はそれが心地よく、幸せだと思っていたし、彼女もそう感じていると信じていた。今思えば、僕はうぬぼれていたんだと思う。そして無神経だった。二月の土曜日、僕たちは一変する。

彼女と出会って二ヶ月がたった頃、僕の変化に気づいた友人が、僕の家を訪ねてきた。友人は「自分は人生を直感だけで生きている」といい、実際僕もそれを信じていた。いや、信じざるを得ないと言ったほうがいだろうか。トラブルは全て彼がいなくて起き、彼が来る頃には解決した。彼の選ぶ女性はおおよそそのとき彼が持っていないものを全て持っていて（それはお金であったり、時間であったり、優しさや、かいがいしさや、無関心さだった）彼は当時常にバランスの取れた人間であったと思う。

彼は僕の部屋に来るなり開口一番「お前、最近よくないな。」と告げた。僕には心当たりがなかった。なにしろその頃、僕は自分が世界で一番満たされていると感じていたからだ。

「何が？別に何も変わらないけど。」

「お前は、人間を見る目はあると思う。これは俺の勘だけだな。」

「君の勘ほど当てになるものはないね。」

「だから、自分から不幸になるな。」

「意味が分からない。僕は十分今幸せなんだけど。」

まあいい、と彼はタバコに火をつけた。そして、もうすぐ分かることだ、と続けたときに僕の部屋のチャイムが鳴り、音が消える前に扉が開いた。薄い光とともに現れるのは、僕の幸せだ。

「好きにすればいいんだけどな、結局は。」

彼がそうつぶやいた。そうつぶやいたんだと思う。彼女は何も知らずに僕の部屋に入り、友人を見て微笑んだ。友人は通り一遍の会釈をし、そのまま僕のタバコを吸い続けた。

彼女は「帰るね。」とだけ言い部屋を出た。そして僕は一人になった。

その次の週から彼女は現れなくなった。僕は用もないのにスーパーに行き、申し訳なさからそのたびにカップめんを買って帰った。彼女は現れなかった。生きているのか死んでいるのかも分からないにしろ僕は彼女の電話番号を知らない。同じアパートなのに、僕は彼女の住んでいる部屋番号すら知らないのだ。

そして、再利用の方法を真剣に考えなければならぬほど僕の部屋のごみにカップめんの中から容器が増えた頃、僕の部屋に小さなメモが飛び込んでくるようになる。

にんじん…二本

ジャガイモ…一袋

しょうゆ（キッコーマン）

ポテトチップス（うすしお）
キャベツ… 1 / 4

あと、純君が必要だと思うものを。今日は味噌汁も作らなきゃいけないの。

それは彼女からのメモで、僕はそれを見るなり自分のしなければならぬことを理解した。理解してしまった。

その日の夜、スーパーに出かけた僕は、メモのほかに豆腐とうす揚げと、卵を一パック買い、メモの端にそれらを買ったことを付け加えた。

僕はそれをもう数ヶ月続けている。冷蔵庫は苦しみ、そしてぐさま吐き出す。

「ねえ？嫌になったりしないの？都合よく使われてると思ったりしない？」

彼女が尋ねる。決まりきった会話。僕の答えも常に用意されている。

「良子さんがばれないように、かつゆつくりとした時間を僕と過ごしたいからやってくれていることでしょうか？なのになんでそんなふうに考えるんですか？」

「だって、純君みたいに若い子ならもとかわいくて若い子も興味を持ってくれると思うし、私なんて おばちゃんなのに。」

僕はため息をつく。少しわざとらしいだろうか。

「20代の人間が自分のことをおばちゃんなんて言わないでください。そんなこと言ったら僕もあつという間におじいちゃんになっちゃうじゃないですか。」

「そうかもね。でもきつと、おじいちゃんになった純君もかわいと思うよ。」

そんな誰だかわからない僕じゃなくて、今の僕を見てください。

僕をきちんと見てくださいよ。こんなに好きなことは、伝わっていますか？

彼女は優しく微笑んで、服を脱ぎ、僕を僕のベッドへと誘う。僕はそれに従う。多くのことに目をつぶり、僕は彼女に体を預ける。僕がその瞬間に感じている幸せなんて、誰も知らなくていい。

彼女は僕をうまく利用していると思っているのだろうか。僕はそうは思わない。ベッドの中の彼女は、僕が今まで出会った女性の中でもうんと幼い。僕の腕を枕にして、僕の胸を支えにして、彼女は小さく仮眠を取る。その寝顔は、自分が父親になってしまったんじゃないかと錯覚するくらい油断した甘い顔だ。その顔はきつと誰も知らない。彼女を捕まえた、その顔を見る資格を持つ唯一の人間でさえも。

思考の後、僕は自嘲気味に笑う。それに価値を見出すことがすでに、枷の付いた人間の思考じゃないのか。

彼女が眠ってしまったても、僕が眠ることはない。僕はこれで何度自分の部屋の天井をただ見つめているのだろうか。彼女の寝息は細い。僕の腕が徐々にしびれた。甘美なしびれ。彼女の重みが生み出すしびれ。土曜の午後。カーテンの隙間から入る日は、少しずつ弱くなっていく。部屋は次第に夜の気配を帯びる。さっきまで見えていた世界が薄いカーテンをかけていく。僕はその世界で一人過ごしている。

時折友人の言葉を思い出す。僕は友人を一人失い、その代償に幸せを得た。でも、その幸せが、本当は幸せという言葉の意味からずいぶんとかけ離れたものだったとしたら。僕は再び天井を見る。当然、そこには答えなんて書いてありはしない。

彼女は本当に買い物に出ていると、家族全員がそれを信じているのだろうか。子供は一緒に行きたいと言わないのだろうか。夫は彼女の変化に気づかないのだろうか。もしかして、彼女は食材を運ん

でくるだけの、それを加工し、誰もがうらやむ夕食をただ作るだけの人間だとも思っているのだろうか。果たして現実がそうだとし、それが幸せの一つの形も成していないとしても、僕はそれを壊したくはない。壊したくはないのだけれど。

結局、幸せを探すことなんて、もちろん作り出すことなんて、できはしない。

「今何時？」

彼女の第一声は決まっている。セックスをすると眠くなる、という彼女の話は常に正しく、今まで一度も眠らなかったことはない。ただ、予定の時間よりも遅くまで眠っていたこともない。彼女の時計はあまりに正確で、どこまでも残酷だ。

「大丈夫。まだ5時までは30分ありますから。」

そう、と彼女は体を起こし、さっき脱いだ服を拾い出す。でも、それをすぐ身につけることはしない。僕はそんな彼女の弱い体を後ろから抱きしめる。薄い体は、まるで僕の体にしみこむようにしつかりとくっつく。

「来週も大丈夫なんですか？」

「どうしたの？別にいつもどおりよ？」

いつもどおり。

「わかりました。じゃあ待っていますね。」

「予定があるならちゃんと言ってね。そうしたら来ないから。チャームを押して誰も出てきてくれない 家なんて、怖くて近寄れないんだから。」

彼女はそう言って笑う。胃が搾り取られていくのが分かる。僕が予定を入れないことなどすっかり分かっているという笑顔。全ては彼女の思い通りに。

「若い人間の全てに充実した予定があるわけじゃないですから。来週の土曜日も必ず暇ですよ。またそのときに。」

「たまにはウチに遊びに来てくれてもいいのに。きつと拓馬も喜ぶから。」

あなたの大切な人は一体誰ですか？守りたいものはなんですか？僕は一体何を信じて、何を守り、何を壊してしまえばいいんですか？僕と一緒に世界の端で膝を抱えたいのですか？中空に舞う問い。どうせ全ての答えは彼女の手のひらの上で今日も転がっているのに。「考えておきます。でもね、良子さん。平日の学生はあなたが考えているよりもずっと忙しいんです。よ？信じてもらえないかもしれないけど。」

「そんなことないわよ。だって、純君すごく早い時間に出かけてすごく遅い時間に帰ってくるじゃない。あれって大学で勉強してるんでしょ？私にはぴんと来ないけどさ。だからきつと大変なんだと思。う。その上週末はおばちゃんの手をしなければいけないし。そのために平日のうちに必要な食材を。買いに行かなきゃいけないし。」

「おばちゃんは、やめてください。ね？やめてください。それに、自分が望んでいることをそっちから。否定されたら僕はどうしていいかわからなくなっちゃいますよ。僕が会いたいから会うんです。あ。あなたが嫌になったらあなたが来なくなればいい。そして、土曜の午後にスーパーへ行けばいい。たっ。たそれだけのことなんです。」

彼女の耳元で、僕は僕を伝える。それ以外言えることなんてない。抱きしめられている彼女は微動だにしない。

「そうね。ごめんなさい。」

僕の腕を振りほどき、拾った服に袖を通す。気がつけば時間は確実に進んでいる。タイムリミットへ、軋んだ音を立てたジェットコースターがその線路を滑走する。線路の先は、彼女にしか分からない。

「何か食べたいものはある？」

彼女は玄関から出る直前、僕にそんなことを聞いてきた。

「良子さん以外ですか？」

「当たり前。そんなこと言ったらリクエストなんて聞いてあげないから。」

「じゃあシチューを。もう少しおいしい季節になってからでいいですから。」

わかった、期待していいからね。彼女はそう言って扉を閉める。重いドアがぱたりと閉まる。彼女はいなくなる。僕は力なく壁に寄りかかる。今日が終わる。そう思わせるに十分な疲労が僕を包む。玄関にはまだ彼女の香りが残っている。僕はあわてて換気扇をつける。彼女に支配されている間、僕は僕でなくなってしまうような気がするのだ。狂信的な自分を否定する術を、僕は身につけなければならぬのだろうか。

彼女の足音は、僕の部屋を抜け、いくつか上の階の、いくつか横の部屋で止まる。玄関が開く感覚が僕に伝わる。彼女が部屋に入る。子供が飛びつく。彼女は優しく息子の頭を撫でる。さっき僕にしたそれと同じように。リビングでは夫がテレビを見ている。休みだからと夕方から酒を飲んでいる。彼女は袋の中からゆつくりと食材を出し、冷蔵庫にしまう。今日使う分の材料はキッチンに並べなおす。そう言えば。僕は思い出す。彼女は肉じゃがと言ったけれど、僕は間違いない。シチューのもとを買ってきたはずなのに。彼女は何を作るのだろう。彼女はこれから何をするのだろう。僕の思考はさび付いた映写機のようにそこで止まってしまう。これ以上は見たくないという自分への防止弁なのかもしれない。

僕は自分の部屋に戻り、乱れたベッドを元の形に戻した。部屋はもう暗い。手に取れる世界は恐ろしく狭くなってしまった。僕は小さな机に寄りかかり、新しいタバコに火をつけた。煙は僕の部屋をゆつくりと旋回する。優雅に、自由に。そして次第に僕の部屋以外の出入り口がないことに気づき、絶望し、焦り、そして諦めたよう

に床を這う。薄闇の中、僕は彼女の少し大きい乳房を思い出した。

僕はきつと、何かに駆られるようにこれから彼女を抱くだろう。彼女はきつと、それを全て受け入れるだろう。何しろ彼女から僕の部屋にやってくるのだ。必然的にそれは起こる。ただ、僕は本当はもう逃げ出してしまうたいんじゃないかと思う。出口のない世界をさまよう煙のように、僕は沈んでしまってはいけないんじゃないのか。彼女に本当に必要とされているのか。偶然によって生み出された空虚な幸福にあてられて憔悴しきってるだけなんじゃないのか？無駄な問いを繰り返す、土曜の夜。そしてどれだけ考え、どれだけもがいても、また来週の土曜はやってくるのだ。さあ、僕も彼女のように笑おうじゃないか。

僕の部屋が乾いた音を立てる。ああ、もし叶うなら、僕の部屋などこそのまま消えてしまえばいいのに。そして僕をこの世界から。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5969n/>

小さな挨拶の、その後で

2010年10月8日11時52分発行